

日本浪漫派の問題——保田與重郎のレトリック——

はじめに

ここで取り上げられる一九三七年以降の総力戦期に、いわゆる文学の立場で、もつとも影響力をもったのは、日本浪漫派の文学運動であったといえるだろう。一九三四年のナツプ解散後の混乱のなかで転向文学が生まれ、一方では文芸復興といわば空景的な文学界の盛況を背景として登場した日本浪漫派が、〈哲学〉や〈精神科学〉の言語とは異なる〈文学〉の言語で、総力戦をどのように語ったのかというのが、ここでの私の課題である。

ひとくちに「日本浪漫派」といっても、そこに集まった

宮川 康子

作家たちは、資質的にも思想的にもきわめて多様な人々であり、それを一括して日本浪漫派として論じることとは不可能であるし、また浪漫主義的傾向一般と「日本浪漫派」の運動を区別するためにも、私はここで特に保田與重郎の作品を中心に話を進めたい。橋川文三がいうように当時日本浪漫派にかぶれた青年たちにとって、「日本浪漫派とは、保田與重郎以外の何者でもなかった」のであり、彼らにもつとも大きな影響を与えたのは、雑誌『日本浪漫派』が終刊したのちの保田の作品であると思われるからである。さらにはいえば、戦後、国際的再編と民族主義の隆盛が起こるたびに、保田與重郎が復活してくる（今まさにその傾向がみられるのは周知の通りである）という事実は、保田の文学の問

題がなお生き続けているということを示していると思われるからである。

国際的状況のなかの文学

まず第一次大戦後の国際的状況を、〈文学〉がどのように表現していたのかを見ておこう。日本近代文学にとつて、国際化はなによりもプロレタリア文学運動として経験された。マルクス主義文学理論は、「作家の個人的技法のうちには解消しがたい絶対的な普遍的な姿で」（小林「私小説論」、しかも世界的な同時性の意識のもとに輸入されたのであって、それはプロレタリア文学に反対する側をもまきこんだ文学界全体の事件であった。そこで見出された「階級意識」が、どのようなものとしてプロレタリア文学の作家たちに受け止められたかは、つぎの中野重治の言葉によく現れているだろう。

ここに「自我」そのものの社会的階級的構造・性格が科学的に明らかにされることとなった。自我、わたくし、人間が、社会的諸規定のアンサンブルとしてあたりらしく見直されることとなった。ここに、近代的自我をもとめてきたかつてきた日本文学の、文学の進路そのものの上での大きな転機が来た。文学者のあいだに、

その自我の社会的階級的転移のために一歩ふみだそうとする動きが力として生まれてきた。（中野重治「プロレタリア文学の理論」）

「近代的自我をもとめてきたかつてきた日本文学」という中野の言葉は、「自我」という概念そのものが、「文学」概念と同様に西洋近代文学の翻訳としてもたらされたものであること、そして明治以来「日本近代文学」が、つねにヨーロッパの文学概念の輸入と受容のなかで、その近代的自我の確立を目指してきたという彼自身の認識を端的に示している。一九二七年の芥川龍之介の死は、そのような日本における近代的自我の破綻を象徴する出来事として受けとめられた。

そして重要なことは、彼ら若い世代の文学者たちは、「近代」が西洋に根ざすものであることを深く理解していたし、同時にみずからの自我が日本の伝統から乖離していることも自覚していたということである。

小林秀雄は「故郷を失った文学」のなかで、「重要なことは私たちはもう西洋の影響を受けるのになれて、それが西洋の影響だかどうか判断しなくなっている所まで来ていると言うことだ。……私たちは生まれた国の性格的なものを失い個性的なものを失い、もうこれ以上何を奪われる心配がある」という。「自我」の問題が、このようにアイ

デンティティーの基盤としての「故郷」の希求に繋がっていく時、そこにもう一つの世界的問題である民族問題が浮上してくるのである。この民族主義との関連は、一九五〇年代に、中野が日本浪漫派の問題としてすでに指摘している。

プロレタリア文学運動がもたらした今ひとつの帰結は、「自我」の問題が、国家という枠をこえる階級意識のなかで捉えられることによって、国家権力との対立が先鋭化したこと、中野の言葉を借りれば「日本の人間性と日本の文学にとって国家が正当にその怨敵となった」（「プロレタリア文学理論」ということである。まさにそのためにプロレタリア文学運動は国家権力によって暴力的に壊滅させられてしまうわけだが、日本浪漫派は、このような革命的エネルギーを、文学的閉塞状況の中で異なる方向へ導いたといえるだろう。

保田與重郎のレトリック

保田の文学批評は、このような歴史的状況に極めて鋭敏に、そして戦略的に反応したものであった。周知のように日本浪漫派が一つの文学運動としての立場を鮮明にしていくのは、一九三七年の人民文庫派との論争を通じてであり、

ドイツ・ロマン派の言語を使ってマルクス主義文学理論に対する反理論の立場を表明することによってである。

保田がドイツ・ロマン派から引き出した戦略の一つは、「自己」について思惟する。その思惟の形式がすなわち「自我」であり、それは「形式自身を内容とする形式」であるというレトリックである。いいかえればそれは、自己自身について、それが実際に何であるかということよりも、それをつまみ自己に関する一切の定言を回避するということを意味する。

報知新聞紙上での人民文庫派との論争のなかで、保田は「日本的なもの」とは何かという問いに対して、けつしてその内実を答えない。そして別の場所では、「明治の精神」に関して「何を語るとかいうよりも明治をどういう風に語るかが問題になると思う」と発言している。ロマン主義的イロニーの否定性は、純粹な絶対的自我の表出に向かう無限の自己否定として現れてくるものであるはずだが、保田はそれを主観主義的な思惟形式の絶対化として捉えている。そしてそうすることによって、マルクス主義的文学理論におけるリアリズムの概念を裏返し、思惟の純粹性と抽象化の中にリアリズムを見出していくのである。リアリズムをこのように思惟の形式として捉える言語は、世界の現実

対して何ら責任ある発言をふくまないだろう。それはみずからが語った言葉の責任をとらないということであり、決定的な他者の喪失でもある。保田はしきりに「一九世紀的イデオロギー」からの切断といい、「いつさいのインテリゲンツへの闘い」（「文化対策ないし文化建設」）を標榜するが、それは上記の意味での、リアリテイの破壊と抽象化であり、具体的には一九三七年七月に始まった日中戦争の、このような言語による表現だったのである。

したがって、保田が見出していった「日本」あるいは「イロニーとしての日本」も、実は表象しえない、抽象化の殻のようなものでしかなく、浪漫派内部においても、その内容についての共通理解などなかったのである。

保田はみずからを当時の日本主義者たちから区別しながら、つぎのように言う。「今日日本主義という、これは日本の文化の国際情勢から考えられた時の日本主義であろう。その点でマルクス主義と背腹の思考でなければならぬ」。保田によればそれは「合理から合理を追ってある形を出られぬ」「文明開化の植民知的知性」であり、そのような知性による日本主義理論の建設はナンセンスにすぎないのである（「文明開化の論理の終焉」）。

同様に保田は国策的な教化の言説としての修身主義や、文化対策・文化建設というスローガンにも反対する。「新

しい文学」としての日本浪漫派の言語だけが、日本文化を表象しうると保田はいいたいのだろうか、しかしこのような徹底した反合理主義・反知性主義に基づく否定性の言語が「日本」あるいは「国民」をどのように表象していくのか、そしてそれをどのようなレトリックで、一般大衆に浸透させていくのが問題であろう。

保田は「故郷」というメタファーを多用する。たとえば「イロニーとは言葉の上にあるものでない。言葉の故郷にあるものである」というように。また彼が記紀神話の地、大和の出身であることを効果的に利用していたことは周知のことである。しかしこれがある実体的な故郷を想定したものでないこと、それが「故郷」をどのように思い、語るかという思惟の形式でしかなく、「故郷」の抽象化であることはすでに明らかであろう。先の言葉は「僕らの表現は、表現せねば存在せぬものを専ら表せば足りる」と続く。ここから「日本」「国民」という言葉もまた、現実の日本や日本国民とは、まったく乖離した空疎な抽象概念でしかなかったことは容易に想像できる。

保田のレトリックは、むしろこの抽象化という行為を戦略的に使っているのである。「国民」とは「国民という形式」であり、また「抽象的精神」である、と保田はいう。そして「今日の非常時の担当者はこの抽象精神としての『国民』

に他ならない」と。しかしこの「国民」は彼ら自身の言語をもたない存在であり、二重の意味で保田によって表象／代表されている。「漠然と事変という変革を望み」、黙々と大陸での戦争を実行し、「沈黙の捨身と献身をなしつつある」ものとして。その結果、国民（兵士）を代表して戦争を語る保田の言葉は、「～されてある」「～してしまふ」といった受け身・自発型が異様なほどに目につくことになる。

このような保田の文体は、先に述べたリアリティの破壊と、他者喪失のアモラリティの問題を、言語のレベルで表しているといつてよい。言語の外側から一般化する力、規範的な力を〈文学〉が全く持たない時、〈文学〉はみずから望むものすべてを、「表現によって存在させる」ことができるだろう。その欲望が、どのようなイデオロギーによって構成されているかを隠蔽したままで。ポール・ド・マンの言葉を借りれば、イデオロギーとは「言語的現実と自然的現実の、すなわち対象指示の働くと、現象との混同に他ならない」（『理論への抵抗』）からである。

このような保田の言語が、小林的な「故郷の喪失」と時代閉塞の状況のなかで、「デスポレートな青年たち」にどのような作用を及ぼしたかは周知のことであるし、ここでは触れない。また保田の文学論という文脈で、彼の言葉をとりあげたのではないことは、再度ここで確認しておきた

いと思う。私がここで見ようとしたのは、総力戦を、〈文学〉がどのような言葉で語ったのかということであり、同時にそのことが、文学の言語をどのようなものとして規定していったのか、ということである。

おわりに

中野重治は、一九五二年に当時の民族主義の隆盛を懸念しながら、日本浪曼派の問題をとりあげ、「このグループの演じた役割は、その役をした主な人々、演出者その人たちの手で、一九五二年の今になって、ほとんど全く同じ道でつとめられている。……かりにこれらのグループの一人をとつてみると、あのときも今も、全く同じ調子とポーズとでものを書いている」（『第二「文学界」・「日本浪曼派」などについて』）と述べている。

そして戦争を実際に知る世代が少なくなり、二一世紀を迎えようとしている今、ポストモダンという「近代の超克」の文脈で、新たな意匠のもとに、保田與重郎的な言語が復活していることは周知の通りである。私がここで保田與重郎的な言語というのは、一部のファナティクなウルトラナシヨナリズムだけを指しているのではない。むしろそのような顕在化した主張・定言を回避するかたちで語る言語、

そこに言いえないものとして存在するもの、また密かに国民や民族を表象／代表するような言語のすべてを指しているのである。

おそらく日本浪漫派の問題は、日本浪漫派とは何であったか、保田とは何であったかという問題設定からは見えてこないだろう。浪漫派のイロニーの言語そのものが、言語の機能、その現象的側面を前景化することによって成り立っている以上、極端な話、「戦争」といつても「平和」といつても、その言葉の意味内容の差は問題にはならない、真に伝達されるメッセージは別の所に存在しているのである。

むしろ問題は、戦後の日本近代文学が、総力戦の時代の「理論への抵抗」を、ずっと保持し続けていることにあるのではないだろうか。

(京都産業大学助教授)